

デカルトと心の哲学

-心身問題を考える-

稲越崇文（人間学コース）

（指導教員：堂園俊彦）

キーワード：情念、心身の合一、ソマティック・マーカー、理性

序論

一般に、我々の心の中にはある閾いが想定されている。それは、魂のうちの理性的部分と非理性的部分との対立である。アントニオ・ダマシオが提示している仮説は、そうした哲学的伝統を問い直すものであった。『デカルトの誤り』の問題意識は、デカルト哲学に由来する二元論的な心身関係が、我々の心に関する誤解と偏見を生み出しているということにあったのである。しかし、彼のデカルトに対する批判は正当なものだろうか。本論の目的は、ダマシオの指摘を手掛かりとして、デカルト哲学の立場から「心の哲学」について論じることにある。

1. デカルトの誤り

情動と感情の働きがときに推論の合理性を混乱させることを疑う者はいない。しかし、そうした常識に反して、いくつかの症例が示している個人的、社会的次元における意思決定障害は、情動と感情の衰退を原因として見られる。情動や感情の働きが弱まることは、それらが強過ぎるのと同じくらい、我々の行動を不合理なものにさせているのである。合理的な計画や決断の思案、情動の処理、及びイメージの記憶は、それぞれ本質的に異なった機能であるにも関わらず、それらの正常な働きを生み出すための脳の諸システムは相互作用的な関係にある。ダマシオは、この心のプロセスの不可思議な連携に注目し、身体から脳まで続く神経組織の連鎖を「理性のループ」と呼び、情動と感情がその中で担っている重要な役割を強調する。

神経生理学的に見れば、一個の有機体は「純身体」と「脳」から組織されており、両者は生化学的・神経的回路によって不可分なまでに結合されている。そしてまた、有機体は環境との相互関係から、様々な状態の絶え間ない変化のうちであり、脳の機能はそれらの情報を熟知することで、適切な生存の達成を可能にしている。ダマシオの言う合理性にとって重要な情動と感情は、このような生物学的組織の協調関係から生み出される生体調節や生存傾性の一つの表れなのである。

ダマシオの言う「情動」とは、捕食者や威嚇に対する恐れなどの評価的なイメージと、脈拍の上昇や筋肉の硬直などの

情動の変状をもたらす反応との組み合わせであり、それが獲得される成長段階に応じて、一次のものと二次のものに分けられる。また、「感情」とは、親しい人の顔を思い浮かべている間に感じる喜びのように、ある思考のイメージと、その時の身体状態のイメージとを並置して知覚することであり、情動的变化に由来するものと、背景的な身体状態に基づくものがある。感情の本質は身体に関する知覚であり、我々の評価や質的なイメージの認知プロセスは、脳-身体を含めた有機体の相互作用から生み出されているのである。

そして、これらの情動と感情がもたらす合理性とは、推論や決断を迫られる場面において、感情によって予測されるネガティブな結果から、選択オプションの選別を行うということである。我々は可能性のあるすべての選択肢を吟味しているわけではない。そこには密かにであれ、意図的にであれ、一種のバイアス装置として働く生物学的メカニズムの作用がある。これが「ソマティック・マーカー仮説」である。

このようにダマシオは、「心」というものを理解する上での身体志向を主張し、身体と脳との構造的、機能的な結合に加えて、有機体全体と環境との相互作用ということを考慮すべきであるとしている。我々が「心」と読んでいた生理学的作用は、有機体全体の産物として、その生存のために存在しており、心的現象は、環境の中で相互作用している有機体という文脈においてのみ完全に理解されるのである。

したがって、「デカルトの誤り」とは、総合的な有機体的視点を無視した限定的、脱身体的な「心」を描いたことにある。現代の「心」に関する議論が錯綜し、多くの科学者が偏見に陥っているのは、二元論的な心身関係を打ち出した哲学者たちの影響であり、「デカルト」はその象徴なのである。

2. デカルト再考

それではデカルトは、本当にダマシオが言うような誤りに陥っていたのだろうか。現代の「心身問題」に関する哲学的立場は二元論と一元論に大別され、前者の代表がデカルトであることは言うまでもない。しかし、それはあまりにも単純化した語り方である。彼の立場を理解するためには、心身の実在的区別が達成される過程を正確に捉える必要がある。

デカルトの哲学的探求は、「懐疑」から始まる。「方法的」とか「誇張的」と呼ばれるこの懐疑は、いわば一種の思考実験であり、純粋に理論上の問題である。そこで、手段としての疑う理由が思案され、感覚の対象も、数学の証明もすべて懐疑に付され、最終的には、あの「悪しき霊」の想定にまで行き着く。しかし、それは同時に、ある確信をもたらすものであった。疑うことも、欺かれることも、この「私」がいなければ不可能である。そしてまた、この「私」とは「考えるもの」であり、それはどのような懐疑の前でも確実でありうる真理なのである。

しかしながら、懐疑による「思惟する私」の結論は、そのまま心身の分離を意味するものではない。なぜなら、両者が互いに区別されるためには、懐疑の想定を破り、物的本性についての判明な観念をもつことが要求されるからである。そこでデカルトは、神に関する証明を経て、我々の判断の能力が神の誠実によって保証されていると断定する。ここから、「明晰判明の規則」が絶対的なものとなり、正式に心身の実在的区別が確立されるのである。

だが、懐疑の想定が解かれるうちに、ある矛盾した事実が明らかとなる。「自然の教え」に従えば、精神と身体は混合したものとして感じられ、そうした感覚にも一定の有用性が認められることから、この「合一」という逆説的な事態を説明しなければならない。しかしまた、身体はそれ自体として見れば、まったく機械論的に理解されるものであり、精神はいかなる部分にも分割されないことから、心身は合一しているとはいえ、それはあくまで異質なもの同士の結合としての複合物である。つまり、「心身の合一」ということで問題となるのは、身体と精神の複合物としての「私」であり、その中で、異なる二つの実体が働き合うという機能の連続性なのである。

3. 心の哲学

本来、異なる性質をもつものである精神と身体がいかにかし働き合うのか。これは当然の疑問である。デカルトによれば、我々の認識は四つの「原初概念」に基づいて形づくられており、これらの概念はそれ自体によってしか理解されないものだと言われる。それゆえに、「合一」という事態において、精神が身体の中で働く力の概念と、物理学的な法則に従って、物体同士が働く力の概念とは区別されなければならない。また、それぞれの概念は別々の能力によって把握されるものであるから、「合一」を理解するようになるのは、物理学知性や想像力を働かせる——物理学におけるように——ことを控え、日常の交わりの中で感覚を用いることによってなのである。

精神と身体の違いと合一とを同時に理解することができなるとすれば、二つの議論の間には論理的な矛盾があると言わざるをえない。しかし、デカルトはその双方を、人間の相異なる領域の事柄として認めている。彼は人間活動をある一つの形式によってのみ一元的に理解するのではなく、その内に

異質な複数の次元を認めて、それを多面的に見渡そうとする独自の立場を打ち出しているのである。したがって、彼の心身二元論のみを取り上げて、デカルト哲学を一面的に理解するだけでは十分ではない。それとは別の局面として、「心身の合一」という主張に関する解釈が必要になるのである。

そこで注目すべきは、彼の『情念論』である。デカルトは、能動と受動という概念に基づいて、精神と身体に固有の機能を区別する。そして、精神の受動としての「知覚」は、精神が身体に働きかけられることで成立する機能であるから、この「情念」に関する考察によって、「心身の合一」を理解することが可能になるのである。ここで前提となるのは、精神が身体全体と有機的かつ不可分に合一しているということである。松果腺による生理学的説明は、精神の局在を意味するものではない。なぜならば、デカルトが想定しているのは両者の間の「相互作用」であり、それは、精神が身体を動かし、身体が精神に働きかけるという事態を説明するためのものだったからである。

また、デカルトにとって、精神の能動としての「意志」は、その本性上、自由なものであるから、身体によって強制されることはない。そのことは、懐疑の最中でも経験されたことである。同時に精神は、「情念」に対しても、絶対的な支配力をもっている訳ではない。意志が情念を抑制できるのは、間接的な方法によってのみである。すなわち、習性によって偶然に結びつけられた情念を引き起こす運動に対抗できるのは、それとは別の情念を意志し、そのための理由や対象を考案することによってなのである。感覚的である精神と、理性的である精神は同一のものであり、精神の中の闘いは、異なる欲望同士の対立として捉えられているのである。

結論

デカルト哲学に関して、次の二つのことを誤解してはならない。第一に、彼のよく知られた心身二元論とは別に、「心身の合一」という相互作用の関係があるということ、第二に、「情念」は抑制されるべきものではなく、それが引き起こされる仕組みを理解することで、その効用を生活の喜びや楽しみとして享受できるようになることである。

デカルトが提示しているのは、人間の多様な在り方を認め、それを素材に捉えるという人間観であった。今日の二元論一元論の源泉は「デカルト」にあり、彼のテキストに立ち返ることで、心身問題を捉え直すことができるのである。

主要参考文献

- ・ A. R. Damasio. *Descartes' Error*; Vintage Books, 2006 (『デカルトの誤り』田中三彦訳、筑摩書房、2010)
- ・ 山田弘明『デカルト『省察』の研究』創文社、1994
- ・ 小林道夫『デカルト哲学の体系』勁草書房、1995